

1. 磁石

2018年1～12月のネオジム磁石の生産量は、前年比5%強増の14,000トン強であった。特に2018年第2四半期後半から第4四半期前半は、自動車、産業機器向けが好調に推移した。2018年の日本の自動車生産は微増、HV車を中心とした電動車両は前年並みとなったが、HV新型主力車が投入された2018年第2四半期以後のHV車生産は前年を上回った。特に好調な設備投資による産業機器向けのモーターは10%強の増加ととなり、ネオジム磁石消費増に大きく寄与した。

一方、2017年第3四半期に上昇した原料価格も第4四半期から2018年にかけて低位安定であったことも、磁石の消費増に寄与した。2018年の中国の希土鉱石採掘許可量が2017年より増加したこと、特に2018年後半はミャンマー、米国からの希土鉱石輸入量が著しく増加したことから供給過剰となり、Nd、Di、Dyの価格は低位安定となった。

2019年は洋上風力発電の増加や電動車両生産台数の大きな伸びが期待されるが、2018年第4四半期後半からは米中貿易戦争の懸念から在庫調整による急激な需要減もみられる。また重希土鉱床であるミャンマーの鉱石は、中国南方鉱と同様の環境問題や不法採掘などから安定供給が懸念され、流通在庫が減少する2019年後半にはDy、Tbの価格上昇の可能性も高い。米国、豪州の増産から軽希土価格は低位安定すると見られること、磁石の重希土削減が進んでいること等から、2019年のネオジム磁石需要は好調であった2018年を上回ることが期待される。

2. 蛍光体

2018年1～12月の蛍光ランプ国内出荷個数は前年比で約15%減であった。LEDランプへの代替が進んでおり蛍光ランプ需要の縮小傾向が続いている。

2018年1～12月の薄型テレビ国内出荷台数は前年比で約4%増であった。国際的スポーツイベントの開催、4K・8K放送の開始などが買い替え需要を喚起したと思われる。液晶テレビのバックライトは現在LED系が主流である。有機EL系も徐々に売れ始めた。

このような状況により蛍光体向けレアアースは減少した。

3. セラミックコンデンサ

2018年1～12月のセラミックコンデンサの国内生産は前年比4.3%増の10.46億個となった。

自動車・産業機器向けは自動車の環境対応や安全性向上の為に電装部品の搭載個数が飛躍的に増加しており、産業機器も電装化の進展で需要が拡大している。通信機器向けもスマートフォン生産台数成長は鈍化しているものの高機能・高性能化により需要は堅調に推移している。中華圏における生産台数の調整も進み回復基調にある。PC向けも高性能化による1台当たりの部品数増加などで需要は拡大している。

しかし、レアアース国内需要は需要家の生産の海外シフトやセラミックコンデンサの小型化、省レアアースの進展により大きな伸長は見られない。

4. 排ガス触媒

2018年の世界の自動車販売台数は2017年から微減。前半は好調であったが後半は失速。特に中国、欧州の販売不調が続いている。国内の販売は堅調に推移、北米の販売も堅調に推移していることから国内自動車生産台数は2017年から微増となった。2018年1～12月の自動車排気ガス浄化用触媒生産量は11,605トンと、2017年1～12月の11,325トンから2.5%増、さらに2017年から販売量については4.4%増、販売金額については20.6%増となった。ガソリン車の世界的な排ガス規制強化による需要増と、販売金額の増加は触媒に使われるパラジウムの市況の影響によると思われる。

2019年については、引き続き2018年後半からの世界自動車市場の減速の影響が懸念される。また国内では10月に予定されている消費税引き上げにも留意する必要がある。

5. 研磨材

液晶用ガラス基板、ハードディスク用ガラス基板などに使用されるセリウム系研磨材の2018年1～12月需要は、前年に続き堅調に推移した。液晶用ガラス基板向けについては、パネル市場で一服感が出た前半はやや弱含みだったが、後半は堅調に推移した。一方、ハードディスク用ガラス基板向けは、SSDへの置き換えトレンドは継続しているものの、サーバー等の大容量向け需要は拡大していることから、全体需要は前年並みに推移したと見られる。